

＋ 3 9 【きんまきょう】

こどものころはだれでも、(例外はあるでしょうが) お金というものに重きをおきません。

それがおとなになるとだれでも、(例外はあるでしょうが) お金が第一とかんがえることになります。

これはどういうことでしょうか。

まずは、お金が生活と密着しているからでしょう。

つまり、生活の範囲内の話で、何を買うにも何を借りるにも、どこに行くにもどこに行っても、お金がかかります。

だからこどもだって、そういうことをするのに全部自分のおこづかいからださなければいけないとなると、お金第一になるかもしれません。

そして、お金が欲望と密着しているからでしょう。

これは日常生活とはかけはなれますが、たとえば男ならおもいどおりになる女が欲しい、だれも乗っていない高級車が欲しい、一級避暑地に別荘が欲しい。

女ならたとえば、だれも持っていない高価な貴金属が欲しい、高級住宅街に立派な一軒家が欲しい、豪華な世界一周旅行券が欲しい。

みんな、大きなお金があれば、叶えられる欲望なのです。

近い将来には、自分の命が助かるか助からないか、なぞも、お金の大小で決まるかもしれない。

日本の医療現状を見渡すと、じっさいにそうなりつつあります。

命とお金の関係なら、生命保険のほうが濃厚でしょう。

生命保険なんかがあるから、保険金殺人があとをたたない。

殺人はできないが、生まれながらの貧乏人で、大きなお金が欲しい人は、宝くじや馬券を買います。

それでも駄目なら、恐喝(きょうかつ)や横領(おうりょう)や強盗(ごうとう)をやったりします。

人間は本来的に不完全なものですから、なにをやらかしても不思議ではない。

ですから、お金を運営する国や団体や企業のほうで、あれこれかんがえなければならぬのですが、弱肉強食の世界(社会)は、何世紀何十

世紀経っても変わりはない。

だれが作ったかしらんが、万事お金の世界（社会）は、どこかの時点で破壊しなければいけないとおもわれます。

それはさておくとして、お金がらみのおぼけの紹介です。

「だれをみても、おかねちょうだいおかねちょうだいって、うるさいやつがあらわれたんじゃ」

懐爺に報告しました。

「町の人ですか。どんな顔をしていますか」

「まちのひとでも、むらのひとでもないのう。にほんじんでもないかもしれんわう」

「きわめて卑しくなさない顔をして、お金をあげないと、泣いたり喚いたり、はては土下座（どげざ）したりしませんか」

「そのとおりじゃ。わしはこじきかとおもうて、ごえん、あげたんじゃが、おかねさえあげれば、きげんがよかつたのう」

「了解（りょうかい）です。金魔狂（きんまきょう）です」

懐爺はあっさりといいました。

「きんたあ、わしのしんせきかい」

金が付くと、ぼくは神経質（しんけいしつ）になります。

「いえいえ、金ちゃんとは親戚どころか、正反対の無関係。お金が好きで好きで、お金のためならなんでもするおぼけです」

「なんでもたあ、ぶっそうじゃのう」

「当面（とうめん）の対策（たいさく）としては、財布（さいふ）に小銭（こぜに）だけ入れて、これしかないがよかつたらどうぞ、と財布ごとあげてしまうことですね」

やっぱりそうか。

「されど、それもくやしいってんで、なぐってでもおいかえす、むらびとがおおいのう」

「それはかれらがすでに、【きんまきょう】にとり憑（つ）かれ始めている証拠（しょうこ）でしてね。金は天下のまわりもの、という本質をわかっている大人は、【きんまきょう】にとり憑かれます。とり憑かれた

大人たちでこの世があふれたら、この世は地獄（じごく）以下となります」

懐爺の説明は熱を帯びています。

きっと懐爺はお金がきらいで、お金にとり憑かれた人はもったきらいなのです。

「じごくよりしたがあるんか。それはさいあくじゃのう」

「最悪です。しかしまや町は、【きんまきょう】にとり憑かれた大人たちでいっぱいです。もうとり憑くしまがないから、開発（かいほつ）の目的（もくてき）で、【きんまきょう】はこの村にまでやってきたのでしよう。金ちゃんは、町で流行りだした歌をしていますか」

かねかねかねよかねかねよかね
なにがなんでもかねかねかねよ
かねがなくてはよもひもあけぬ
かねがないやつひとでなしかね
かねがないやつしぬがいいかね
よかねかねかねはよしねよかね
しねばかねかねどどんとはいる
こんなしくみはひとだからかね
ひとがいだいかかねがいだいか
かねかねかねよかねかねよかね
なにがなんでもかねかねかねよ

「しらいでか。だばこれから、このむらにも、へんなうたが、はやることになるのう」

「それを防ぐには、ひとつだけ手立てがあります」

と懐爺はぼくに近寄って、囁き声でこういったのです。

「村中のお金をぜんぶ集めて、広場で一気に燃やしてしまうんです。そしたら【きんまきょう】はまったく近づきません。じつは【きんまきょう】のおばけとしての本来の目的は、お金の残酷さ、非情さ、姑息（こそく）さを、人間に伝えるものですから、それを人間が心底理解したなら、もうそれで満足なのです。とにかく【きんまきょう】から村を守る

手立てはそれしかありません」

「みんな、きょうりよくしてくれるかのう。おかねをもやすなんて、ばちがあたらんかのう」

ぼくは単純な疑問をぶつけました。

「あとで灰になったお金を銀行にもっていけば、たぶん新しいお金と替えられます」

「もとのもくあみじゃ。そしたらまた【きんまきょう】がやってきて、そしたら【きんまきょう】をやっつけるために、おかねをもやさにならん。どうどうめぐりじゃ」

ぼくはまた単純な疑問をぶつけました。

「そうです。その元の木阿弥や堂々回りをやらないといけないのです」

「めんどうじゃのう。そのうちぎんこうだって、おかねをかってにもやしやがってと、あたらしいおかねにかえてくれないじゃろ」

ぼくはさらに単純な疑問をぶつけました。

「そうです。そうしてお金は村からなくなり、むかしながらの自給自足（じきゅうじそく）の村にもどるといわけです」

「むかしは、じきゅうじそく、だったんか」

「そうです。その時代とても村は幸せでした。その自給自足の風習がいまでも残っているの、村は幸せなのです。けれども将来の村は、【きんまきょう】に侵蝕（しんしょく）されてしまうはずですよ」

なるほど。

半分しかわからなかったが、懐爺を信じるぼくは、敢然（かんぜん）として行動を開始しました。

けれども、ぼくの行動は空回りに終わりました。

どこの家に行っても、いやじゃいやじゃの一点張り。

お金どころか、家の空気もださない、という雰囲気（ふんいき）でした。

ぼくはぼくの説得力が弱いせいだとかんがえて、懐爺に文章を書いてもらって、それを一軒一軒の前で大声で読み上げました。

それでも効果（こうか）はなく、しかたないので、ぼくは貯金箱から最後の五円玉をもちだして、広場で燃やしてみましたが、黒ずんただけで効果なし。

その後、十年が経って、ちょうどぼくが村をはなれたころ、懐爺の予言通り、村は完全に【きんまきょう】に支配されました。

まちがいなく【きんまきょう】自身が、大いに嘆いていることでしょう。

村がどういう状態になったのかは、くどくど解説（かいせつ）しなくとも、まわりを見回してみれば（あるいはじぶんのところを覗いてみれば）みなさんにもおわかりでしょう。